

「保育の社会化に向けて」保育の営みをいかに社会に発信するか
～地域の特色を活かした保育園からの発信～

千葉県・市川市・本北方保育園
園長 鵜沢 幸子

保育園の概要

定員 130名 現員 126名 職員総数 26名 設立年月日 昭和51年4月1日

設置市区町村概要

人口 約48万人 保育所数 公立(指定管理園を含む)22園 (私立)60園 (こども園)2園

[はじめに]

市川市は、千葉県の北西部に位置し、江戸川を挟んで東京都に隣接している。都心から通勤圏内にある文教・文化・住宅都市であり、多くの子育て世代が居住し核家族化が進んでいる。また転入転出が多く世代間の交流が希薄化している現状にある。

そのような中、市川市では、平成27年度から平成31年度までを計画期間とした「市川市子ども・子育て支援事業計画」を策定した。

そこで保育園は『子どもが育ち子どもを育てあう街づくり』を基本理念に、子どもを生み育てる喜びとして感じられるよう、地域コミュニティーの中核となり世代間をつなげていく役割が求められている。

市川市公立保育園では、世代間交流の重要性を考え、地域社会に向けた活動として小中高等学校や高齢者、近隣の方々との交流を日々保育の中に取り入れ地域に根ざした保育園を目指している。

私たちは、今回のテーマ「保育の社会化に向けて」保育の営みをいかに社会に発信するかを基に、サブテーマ～地域の特色を活かした保育園からの発信～に視点を絞り公立保育園が地域コミュニティーの中でどのような役割を担っていくべきか、現状を調査し課題について研究した。

[研究方法]

- 公立21園の「地域への発信方法」を調査し、内容を精査した。
- 特色のある「発信方法」及び、各園の地域との関わりについて発表し情報を共有した。
- 「地域を巻き込むためには、どのようにしたら良いか」をテーマに公立21園の園長でディスカッションを行った。
- その後、自園で取り入れられそうな内容・地域への発信について、意識の変化やディスカッションの感想などをアンケートに取り結果をまとめた。
- アンケートから見えてきたものから、各園の地域との関わりについて抱えている課題を探り、

今後の発信の方法について考察した。

[まとめと今後の課題]

- 全園を調査し、保育園からの様々な発信が世代間交流につながり、地域コミュニティーの中核の一端を担っている事を再確認した。
- 各園が行っている地域との関わりは、核家族化が進む中、様々な世代間の交流を行う事でよりよい相互作用となっている。
 - ・「高齢者との関わり」の中では、子どもたちは思いやりの気持ちを育み、高齢者にとっては活力となっている。
 - ・「小・中・高校生との交流」は、園児にとっては兄弟関係を味わう機会となり、小中高生は小さい子を慈しみ、命の大切さを学び、自分もこのように愛されて育ったという自己肯定感や将来への希望へと繋がっている。
 - ・「地域交流」は、地域の親子に保育園を知ってもらい、親同士の出会いの場であり親育ての場になっている。
- 調査の結果、地域によって特色のある交流が見えてきた。その中で、特に特色のあるものとして『近所の商店街にある米屋との米作り体験』『近隣の工業高校との物づくり体験』『住宅密集地にある保育園からの近隣へのおたより発行』『団地内にある園と隣接する小学校との化学実験を通しての交流』などがあげられ、置かれている環境により独自の発信方法が見られた。
- 公立 21 園の園長が特色ある交流についての情報を共有し、その後ディスカッションしたことでも『他園の状況を聞き、受け身ではなく積極的に関わることが大切である』と再確認した。そこから自園の社会に向けての発信方法の見直しに繋がった。
- 地域との繋がりを深めるためには交流の継続が大切で、両者がお互いを理解し、共に満足できることが必要である。
- 危機管理の面からも普段から地域と関わりを持ち、連携して対応できる環境作りが大切である。
- よりよい相互関係をつくるためには、地域の特性をふまえ、地域の資源をどのように活かしていくかが課題である。
- 地域に根ざした保育の実践を通して、保育園の専門性をより強化した上でその機能の有用性をいかに地域に発信し地域を巻き込んでいくか、一層の課題である。

[最後に]

「地域ぐるみの保育」を理念の一つとし、子どもたちの学びや育ちに地域の資源を活かしていく事が大切である。高齢の方と若い子育て世代をつなぐ架け橋として、保育園が中心となりコミュニティーを広げていくことで、結果的には子ども自身が自分の住む町に愛着を持ち身近に感じることが定住につながり、暮らしやすい街作りになっていくと考える。